

19世紀後半の子ども服にみられる ハイランド・ドレスの流行

The Fashion of “Highland Dress” Evident in Late 19th Century
Children’s Clothes

大枝 近子
(Ooeda Chikako)

Abstract :

Highland dress, the ethnic costume of Scotland, regained its prominence among adult men in late 19th-century Britain and became popular even among boys and young men. In this paper I attempt to throw light on the background to this popularity, using as my materials especially articles and advertisements that appeared in the women’s magazine *The Queen*.

The following became evident through my researches.

Following the battle on Culloden Moor in 1746, a ban was placed on the wearing of kilts and on all other customs associated with the Highlanders, as a result of which the kilt became romanticized as a costume associated with a people who had been deprived of their culture. Queen Victoria was particularly attracted to Scotland and to tartan, and she clad princes of the crown in Highland dress, which thus came to acquire an aristocratic connotation. Mothers all over the country thus clothed their sons in Highland dress, thereby contributing to its popularity.

Among the factors that ensured that this popularity was subsequently maintained were the sheer attractiveness of the costumes, the aspiration to authenticity that made these costumes appropriate for wearing on ceremonial occasions, the expansion in the range of uses that resulted from the fact that the costumes were based on distinctive ethnic designs that could also be used for fancy dress, and the fact that the costumes sold extensively because of their functionality in line with mothers’ concern for the health of their children.

キーワード：ハイランド・ドレス、子ども服、クイーン誌

Key Word : Highland Dress, children’s clothes, *The Queen*

1. はじめに

19世紀後半のイギリスにおいて、少年たちの間にハイランド・ドレスが流行した。ハイランド・ドレスとは格子柄模様の毛織物（タータン）を特徴とするスコットランドの民族衣装である。ハイランドとはスコットランドの北西部の高地地方のことをさし、もともとそのあたりで着用されていた一部形式の短いチュニック型の衣服のことをハイランド・ドレスと呼んでいたが、それが18世紀初頭肩掛けとスカート状のキルトに分かれて二部形式になり、現在のような形態になったといわれている。

スコットランドのハイランドの民族が氏族ごとのタータン（クラン・タータン）をいつ頃から持つようになったのかは定かではないが、1745年のカロデン・ムーアの戦いでスコットランド王家がイングランドに敗北した際、イングランド政府軍は今後の反乱を防ぐためにクラン姓の使用を禁止し、タータンをはじめハイランド・ドレスの着用も禁止した⁽¹⁾。しかしその後にも統合された英国政府に不満を抱いて反乱を起こすハイランド人たちが常にハイランド・ドレスを身にまもっていたため、この頃からタータンやキルトがハイランド人たちの象徴として人々に意識されるようになり、ハイランド人たちにとってもそれは自らの民族的な団結力を高める役割を果たすようになった。

19世紀に入り、百数十年にわたるイングランドのスコットランド弾圧の歴史により歴代の国王がスコットランドを訪れることがなかった中、1822年に国王ジョージ四世がエジンバラを訪問することになった。その目的はイングランドとスコットランドとの過去の和解と王家の正当化による体制的安定とも言われるが、その際、手助けをしたのが作家ウォルター・スコットであった。彼は国王自らにもハイランド・ドレスを着用するように助言するとともに、行幸の式典に参加するスコットランド人にタータンを着用するよう義務付けた。この式典を計画したウォルター・スコットは式辞、国王を歓迎するための心構えなどに加え、服装の規定をパンフレットに記載し、人々に告知した⁽²⁾。これがきっかけとなり、氏族ごとのタータンが復活し

たものと思われる。

こうした歴史的な背景をもつハイランド・ドレスが19世紀後半の少年たちの服装に採用されたことはフランソワ・ブーシェ他多くの研究者により指摘されている⁽³⁾。しかし、その流行の要因についての先行研究はほとんど見当たらない。そこで、本稿はこのようにスコットランドの高地の人々の衣服であったハイランド・ドレスが19世紀に男性の衣服として復活した際、なぜそれが少年の衣服としても採用され、長く流行したのかを明らかにすることを目的とする。

資料としては主に1861年に創刊された婦人雑誌 *The Queen* を使用した。*The Queen* 誌はサミュエル・ビートン (Samuel Beaton, 1803-77) がヴィクトリア時代のミドル・クラスの女性を対象に編集した、社交界や宮廷の話題から家庭生活全般にわたる多彩な記事や読み物が掲載された婦人の総合雑誌である。資料としてこの雑誌を選んだ理由は、服飾に関連した記事や広告が毎週掲載されるため当時の服飾の様子を知ることができ、また読者からの質問やそれに対する編集者の回答というコーナーもあり、家庭婦人の服飾に対する考え方もそこから推察できるであろうと考えたためである。

2. ハイランド・ドレスとは

ハイランド・ドレスとはもともとは一部形式の短いチュニックであった。一枚の大きな毛織物（タータン）の中央にひだをたたみ、膝丈の長さになるくらいにして腰に巻きつけてベルトで締める。その際左端が上になるように腰に重ねて巻く。残りの上布はまとめて左肩でブローチやピンなどで留め、布端をたらして着用した。

1728年になり、製鉄業のトマス・ローリンソンにより上部の肩かけ部分と下部のスカート部分が切り離されたと言われており、そのスカート部分が「キルト」と呼ばれるようになった。その経緯については *The Queen* の1882年10月14日号に以下のように掲載されている。

1728年、ハイランドで着用されているフィラベグあるいはキルトを紹介したのはトマス・ローリンソンという製鉄業を営むイギリス人だった。ハイランダーの最も初期の

衣服は大きなタータンの布で、それを広げて肩からひざのあたりまでかける一部形式のものだった。ローリンソンの下で働く労働者がこの衣服で不便そうなのを見て、彼がそれを上衣と下衣に分けた。暑い時には上衣を脱いで、下衣だけで着た。これがフィラベグあるいはキルトとなった。

こうした二部形式のハイランド・ドレスが現在のスコットランドの民族衣装に引き継がれている。

3. 少年用ハイランド・ドレス

当時少年用ハイランド・ドレスは年齢により2種類に分けられていたことが*The Queen*の記事や広告から読み取ることができる。それは、スコットランドの族長たちが着用していた完全な形のハイランド・ドレス (full dress) と、ジャケットとキルトの組み合わせのもの (plainer dress kilt) である。前者は小さな少年用であり、後者は少し大きくなった少年が着用するものであるとしている。

1901年4月20日の記事には絵入りで次のように2種類のハイランド・ドレスの例が挙げられている (図1)。

① 7歳の少年ための衣服 (full dress)

- ・スコットランド族長の衣服を示している
- ・上衣とベストはベルベット製、キャンベルタータンの肩掛けとキルト
- ・伝統的な形のグレンガリーキャップとスポーラン
- ・靴下と靴

② 12歳の少年のための衣服 (plainer dress kilt)

- ・室内外の日常着に適している
- ・巧みなカットで作られた機能的な上衣と黄色がかった濃い緑色のベスト
- ・金ボタンの付いたエラクトキャメロンタータンのキルト
- ・帽子は便利なバルモラル型
- ・黒い無地のウールのハイソックスは折り返し部分がタータンになっている
- ・スポーランは完全なハイランド・スーツよりも上の部分がシンプルである

図1 少年用ハイランド・ドレス
(*The Queen*, 1901年4月20日)

BOYS' HIGHLAND COSTUMES FROM MESSRS ROWAN & CO. GLASGOW.

From all points of view the Highland kilt, as a style of dress for small boys, has much to commend it. It is in almost all cases becoming, is extremely comfortable, and has the further merit of being durable and inexpensive. The one *quid* non is that it should be made by a specialist in this particular class of tailoring, so as to ensure the correctness of detail which is all important. The sketches given as examples of two different varieties of Highland costume, the full dress and the plainer dress kilt, are from models made by Messrs Rowan and Co., of 104, Argyll-street, Glasgow, a firm whose name is well known as successful exponents of their national garb. The first shows a full Highland costume for a boy of



FULL HIGHLAND COSTUME | THE ARGYLE DRESS KILT
FOR A BOY OF SEVEN. | SUIT.

seven, and represents the dress of a Scottish chieftain in one of its most picturesque forms. The doublet and vest are of blank velvet with silver Celtic buttons, the kilt and kilt of Campbell tartan, while the suit is completed by Glengarry cap, sporran, hose and shoes of the traditional pattern. The second sketch is also of a dress kilt, but so much plainer that it is suitable for ordinary wear, indoors or out. The waist coat, business-like coat and vest are of hunter's green cloth, with gold buttons, and the kilt of Eracuit Cameron tartan - the cap is of the convenient Balmoral shape, the stockings of plain dark hosiery wool, with tartan turn-over tops, and the sporran, if it be noticed, is a simple head sporran, much less elaborately mounted than that in the quite full dress suit. Messrs Rowan's prices are extremely moderate, a characteristic which, it may be added, is well maintained in both the suits illustrated, the second of which is of a size to fit a boy of twelve years of age.

つまり、full dressの肩掛けとキルト、plainer dress kiltのキルトはタータンであり、後者は上衣にはジャケットやベストを着るが、これは決まりがあったわけではなく、当時少年たちが着用していたごく一般的なものであった。こうした衣服に折り返しつきのハイソックスと靴を履き、タモジャンターと呼ばれる帽子あるいはグレンガリーというベレー帽に似た小型の帽子をかぶり、皮製の小物入れ (スポーラン) をキルトの上に吊り下げた。スポーランはキルトを押さえる役目も果たしたという。

このfull dressとplainer dress kiltを着る年齢ははっきりと決められていたわけではなかつ

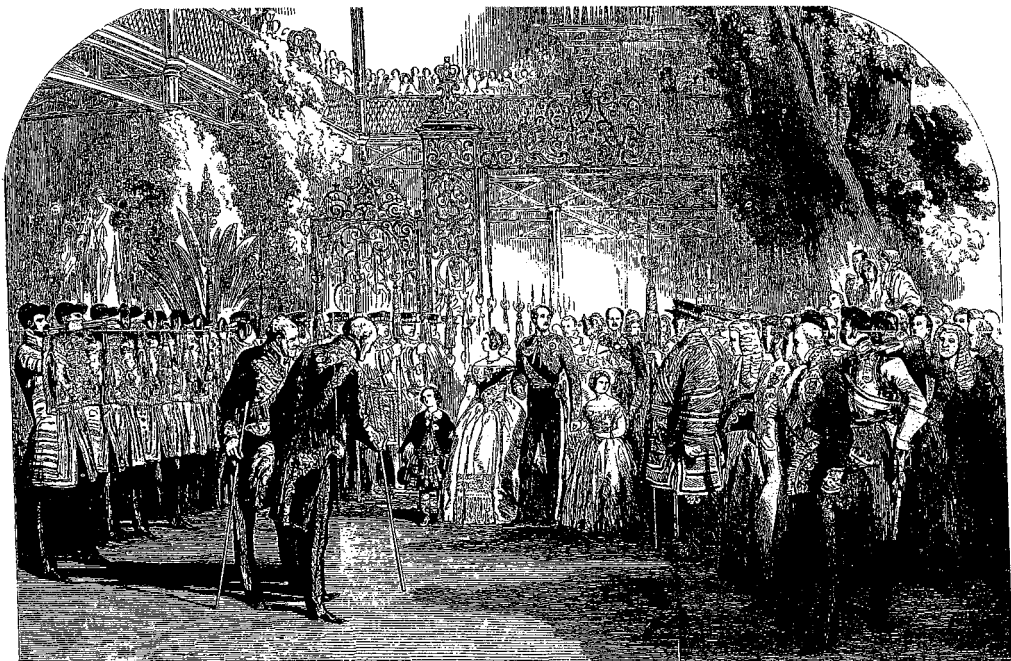
たらしく、「5歳を過ぎると（完全な）スコッチ・ドレスは着用されない」（1864年11月19日）、「年齢が7歳以下であれば、完全なハイランド・スーツを着せる」（1882年7月22日）、「完全なハイランド・ドレスは6歳くらいまで。その後は肩掛けやアクセサリーなどを省略したものを着る。」（1869年12月11日）等さまざまである。

4. 少年のハイランド・ドレス流行のきっかけ

1837年に王位を継いだヴィクトリア女王は、その夫であるアルバート公とともにスコットランド高地の風物を愛し、特にタータンを好んだ。1848年にはバルモラル城を建設し、その外観や内装もアルバート公がデザインし、「バルモラル・タータン」という王室専用のタータンまでも考案した。ヴィクトリア女王は毎年ここに滞在し、ハイランド訪問の際には自らタータンを着用し、夫や息子たちにはハイランド・ドレスを着用させた。この頃の様子が *Illustrated*

London News⁽⁴⁾ で報じられ、たびたびハイランド・ドレスを着た王子たちの姿が確認できる。たとえば、1851年の第1回ロンドン万国博覧会の際のクリスタル・パレスのオープニング・パーティーでは女王に手をひかれて会場に入るハイランド・ドレス姿の皇太子（後のアルフレッド一世）が描かれている（図2）。また、1859年2月26日の記事には皇太子の肖像画が掲載されているが、この時の装いもハイランド・ドレスであり（図3）、さらに皇太子だけではなく、1859年6月4日のオズボーンハウスにおけるアーサー王子（図4）等いずれもハイランド・ドレスを着用している。そして、こうした王子たちの装いは1849年に描かれたヴィンター・ハルターの絵画にも残されている。そこにはスコットランドらしき山並みを背景に、タータンのキルトとジャケットにバルモラル型の帽子をかぶった皇太子と、タータンの肩かけとキルトという完全なハイランド・スーツ姿のアーサー王子が描かれている。

図2 クリスタル・パレスでのオープニングパーティ（*Illustrated London News*, 1851年5月10日）



OPENING OF THE GREAT EXHIBITION.—ENTRANCE OF HER MAJESTY AND HIS ROYAL HIGHNESS PRINCE ALBERT

図3 皇太子の肖像画
(*Illustrated London News*, 1859年2月26日)



このようにヴィクトリア女王がスコットランドやタータンを愛し、ハイランド・ドレスを夫や息子たちに着用させた姿が新聞等で報じられ、一般の人々もその少年たちのかわいらしい姿を目にするようになったのである。

5. ハイランド・ドレス流行の時期

服飾史では少年たちのハイランド・ドレスはおおよそ1860年代から70年代に流行したとされている⁽⁵⁾。しかし、当時の風刺雑誌であるPunchの1857年12月5日号にすでにハイランド・ドレスを着用した少年が描かれている⁽⁶⁾(図5)。小さなやんちゃそうな少年がハイランド・ドレスを身につけている姿は、当時のミドル・クラスの家庭においてすでに日常着として少年がハイランド・ドレスを着用していたことを示している。

一方、いつ頃までこの流行は続いたのかということに関しては、*The Queen*を見ると、1900年11月10日の記事に次のように記されている。

ファッションの変化が少年たちのスタイルに影響を及ぼすにもかかわらず、ハイラン

図4 オズボーンハウスでのアーサー王子 (*Illustrated London News*, 1859年6月4日)



THE ROYAL FAMILY AT OSBORNE.—FROM A PHOTOGRAPH BY CALDWELL AND MONTAGU.—PUBLISHED BY COMMAND OF HER MAJESTY.—BY FRANKLIN AND CO.

図5 小さな少年のハイランド・ドレス (Punch, 1857年12月5日)



PLEASANT FOR "CHARLES DEAR."

Married Sister. "OH, CHARLES DEAR! NURSE IS NOT VERY WELL, AND AS I MUST STAY WITH BABY, WOULD YOU TAKE ERZDZY AND THE TWO LITTLE OWLS FOR A WALK, ONLY CARRY THEM OVER THE CROSSINGS, THAT'S A DEAR!"

ド・コスチュームはまだ流行している。そのひとつの理由はこのような特徴のある衣服に必要とされる絶対的な正しさをもっていとみなされているからである。

1900年に入ってもまだハイランド・ドレスの流行は続いており、伝統的な本物のハイランド・ドレスと同じであることがこの流行が長く続いている要因であるというわけである。

さらに *The Queen* に掲載されている広告を見ても、1900年5月12日号まで確認することができた。したがって、ハイランド・ドレス流行の時期は服飾史で述べられているよりも長く、おおよそ1850年前後から流行し始め、20世紀になってもまだ着用されていたものと思われる。

6. 少年のハイランド・ドレス流行の要因

第一に、ヴィクトリア女王がスコットランド及びタータンを好み、王子たちにハイランド・ドレスを着用させた姿は新聞等を通して人々の目に映ったことが挙げられる。ハイランド・ドレスが少年のかわいらしさを表現するのにうってつけの衣服であったことは1900年5月12日の記事にも「ハイランド・キルトほどかわいくて、少年に似合う服はない。」と書かれている

し、また *The Child in Fashion* の中でも「この時期の子供のハイランド・コスチュームは子ども服の中で最もかわいい。」と記されている⁽⁷⁾。産業革命以降の国内産業の発展により富を得たミドル・クラスの家では、アッパークラスへの憧れを実現することが可能となったが、そのひとつとして母親は息子たちにこうしたかわいいハイランド・ドレスを競って着用させたものと思われる。

第二に、ハイランド・ドレスを販売している店の雑誌広告からは、当時のハイランド・ドレスが備えていたものと母親たちが望んでいたものが一致していたことが伺える。

少年用ハイランド・ドレスの広告記事は1890年代から1900年代に多く見られ、そこでは次の事柄が強調されている。(図6・図7)

- ・歴史的に由緒ある細部までが正確に再現されていること
- ・腕の良い職人による最高の技術で製作されていること
- ・オーダーできること
- ・あらゆる氏族のタータン柄が準備されていること
- ・質の良いすべてのアクセサリがそろっ

図6 雑誌広告 (The Queen, 1902年1月18日)



図7 雑誌広告 (The Queen, 1893年5月6日)



ていること
 等である。スコットランドの歴史や伝統が感じられるような本物そっくりなハイランド・ドレスが最高の技術で作られることが望まれ、またその要求に応えるようなものが売られていたため流行したものと思われる。

第三に、ハイランド・ドレスは正装にも適していたことが挙げられる。「ロイヤル・ドレス」

の著者であるバレリー・カミング女史はその著書の中で、クリスタル・パレスのオープニング・パーティーにおけるロイヤル・ファミリーの様子を描いた絵画を取り上げ、「(女王の)二人の年長の子どもたちはまだ10歳になっていないにもかかわらず正式な服装をしている。」⁽⁸⁾と記している。そこでは長女は女王のものと同く似たドレスを着用し、長男である皇太子はハ

イランド・ドレスを着用している。

それを裏付ける記事が1900年5月12日に掲載されている。

・・・これらは同時に氏族の族長の完全な衣服を再現しているので、イヴニング・ウェアにも適している。

また、1900年12月22日にも「(ハイランド・ドレスは) イヴニング・パーティーの時に着用する衣服として常に必要とされている。」という記述が見られる。したがって、少年用ハイランド・ドレスは正装用にも用いられていたものと思われる。

第四に、ハイランド・ドレスはファンシー・ドレスとしても着用されたことである。ファンシー・ドレスとは仮装服のことであり、当時イギリスでは仮装舞踏会 (fancy ball) が頻繁に開かれており、その際に着用した工夫の凝らされた衣装のことである。動植物や架空の人物、時代服、民族服、職業服などさまざまなものがあり、自由に装い、楽しむ衣服である。ハイランド・ドレスはスコットランドの民族的な雰囲気醸し出し、特徴あるデザインであるため多用されたと思われる。

1876年12月9日の記事には次のようなハイランド・ドレスが記されている。

金ボタン付き黒のベルベットのジャケット、ポプリン製タータンのキルト、肩掛けは銀のプローチで止められ、そのプローチは水晶やオニキスできていたためにより豪華である。とがった銀製の両刃の剣がベルトから下げられ、布製帽子には鷹の羽が飾られ、うしろには幅の狭いリボン飾りがある。タータンの靴下はガーターで留められ、飾りリボンが付いている。靴は銀のパックルつき革靴。

日常的なハイランド・ドレスに比べ、ベルベットという素材や、宝石でできたプローチ、大きな羽飾り付きの帽子、派手なスポーラン等華やかな装いになっており、ファンシー・ドレスらしさを出していることがわかる。

第五に、19世紀後半になると、子どもの健康への関心が高まるが、その要求にも応えることができることとしたことである。

1897年1月11日の *The Queen* に「The Hygienic Clothing for Children」と題する記事ある。そこには次のように記されている。

日々の生活でおとなだけではなく、乳幼児や子どもの健康が多かれ少なかれ害されている。衣服の素材、色、肌ざわり、量などを季節や天候によって調節することが大切である。スワドリリングや紐で締め付けることや硬くて長いペチコートは健康を害する。身体をむき出しにするのも良くない。

こうした人々の関心の中、*The Queen* の読者からの質問コーナーにもどのようなハイランド・ドレスが身体に良いかということが母親から質問されるようになる。1882年7月22日の記事には読者の質問に対して次のように執筆者は答えている。

もし少年が7歳より低年齢であれば、完全な形のハイランド・ドレスを購入することができる。・・・小さな年齢の少年であれば、留め金付きのキルトを着用するのではなく、ウエストを締め付けないようにズボンつりにすべきである。大きな少年でさえ、キルトの下にはくズボン短く伸縮性のある綿のものが適当である。

つまり、子どもの身体を締め付ける衣服は避けるべきであることが述べられている。

また、1901年4月20日の記事にも次のように記されている。

少年のハイランド・コスチュームはすべての場合において快適で、耐久性があり、しかも細部まで正しいデザインでなければならない。これを実現させるためには特別なテーラリングの専門家に作ってもらう必要がある。

そして、この記事の年齢の高い少年が着るドレス・キルトの説明でも「巧みなカットで機能的な上衣」であることが必要であるとしている。

前述した *The Child in Fashion* の中でもハイランド・ドレスは「もっとも健康的である」⁽⁹⁾ と説明されている。このように、80年代頃からハイランド・ドレスも他の子ども服同様、身体を締め付けない機能性に配慮したものが作られるようになり、母親の心配を払拭したものと

われる。

7. まとめ

以上のように、ハイランド・ドレスは19世紀初頭のイギリスでおとなの男性の衣服として復活した後、1850年前後から少年の衣服としても流行した。その形態は完全な形でのハイランド・ドレスは小さい少年向きとされ、少し大きくなるとキルトとジャケットの組み合わせという省略されたものが一般的であった。

この少年のハイランド・ドレス流行のきっかけとしては次の点が挙げられる。1745年のカロデン・ムーアの戦いでキルトをはじめハイランド人の諸風俗が禁止されたことにより、文化を奪われた民族の衣裳であるというロマンティックな雰囲気醸成された。そして、そこにヴィクトリア女王がハイランドやタータンに魅了され、息子たちに着用させたという貴族的な気分が加わり、ミドル・クラスの母親たちはアップクラスへの憧れから好んで息子たちにハイランド・ドレスを取り入れたものと思われる。

そしてこうした少年用ハイランド・ドレスが長く流行した要因としては、何といたってもその装いのかかわらしさが挙げられる。少年の子どもらしさを表現するのいうってつけの衣服であったものと思われる。また、ハイランド・ドレスはなるべく本物に近いことが重視されたため、日常着だけではなく正式な場所に着ていく儀礼的な服装としても着用されたことや、民族的な雰囲気が強く、その独特なデザインからファンシー・ドレスとしても取り入れられたことにより用途が広がっていったことが挙げられる。そして、子どもの健康への関心が高まるようになってくると、身体に配慮した機能的なものが販売されるようになり、なお一層少年用の衣服として定着することになり、長い間流行したのと考えられる。

謝辞

本稿で使用しました*The Queen*および*Illustrated London News*は、日本女子大学佐々井研究室所蔵のマイクロフィルムをお借りいたしました。佐々井啓教授に心より感謝申し上げますとともに、研究室の皆さまにお礼申し上げます。

【注】

- (1) 奥田実紀「タータンチェックの文化史」、白水社、2007年、p.97
- (2) 以倉理恵「ハイランドドレスとウォルター・スコット」、文化生産の諸相、大阪大学大学院言語文化研究科編、2004年、p.2～3
- (3) Boucher, F., *Histoire du Costume*, Flammarion, Paris, 1965, p.313
- (4) 1842年イギリスで創刊された新聞
- (5) Anne Beck, *Clothes and the Child*, Ruth Bean, 1996, p.119～p.120 他多数の服飾史の本に記載されている。
- (6) 小池滋編「ヴィクトリアン・パンチ：図像資料で読む19世紀世界」、柏書房、1995-1996
- (7) Doris Langley Moore, *The Child in Fashion*, Batsford, 1953, p.56
- (8) Valerie Cumming, *Royal Dress*, Holmes & Meier, 1989
- (9) Doris Langley Moore, op.cit., p.56

